

〔新刊紹介〕

木股知史編著 『吉本ばなな
イエローページ』

瀧本和成

吉本ばななの作品が多くの読者を獲得しているのは、「だれもが理解できる平明な物語のなかに、本質的な問いが含まれているということ」であろう。加えて、ばななは「決して先鋭にならずに、ポップカルチャーの広がりのおかげで、普遍的な課題を表現」しており、その方法や文章にも人気の秘密があるといえる。本書は、こうしたばなな作品のもつ魅力と文章表現の面白さを楽しみ味わいながら「この作家の知恵のあり方を新たに発見し直す」主旨で作られている。

序章は、この本が単なる作品紹介の書ではなく、ばななの作品がある種の一貫したテーマをもって描かれていることを示している。ばななが繰り返して描く〈心の風景〉が、実は私たちが日常言葉にはできないが感じている様々な心持ちを〈共通感覚〉として心に響く形で表現されていることを指摘している。そうしたばななが描く心象風景を軸に第一章から第七章は、「ムーンライト・シャドウ」、「キッチン」から「アムリタ」まで各章毎に一作品ずつ取り上げ、様々な視点、角度からばななの作品世界を分析している。たとえば、「キッチン」は「家族を失った孤児のみかけが、

新しい家族について模索する心の遍歴の物語」だが、〈台所〉から〈キッチン〉への言葉の変遷を単なる生活スタイルの変化だと読み取るのではなく、現代人の心の問題としてどのように表現されているか。それらを文化、風俗、社会の変遷史を踏まえて実に見事に現代社会の空間図の中で問題提起を行っているところが圧巻である。終章は「アムリタ」以降の作品を取り上げ、ばななの変化の兆しを捉えようとの試みがなされている。「文学という個人幻想の領域で、どこまで生の深さを表現することができるか」。著者の提示する第二期のばなな作品のテーマは、とても興味深い。それは著者の文学研究の問題意識と重なっているようにも思える。

ほかにも素敵な文章で綴られた二五からなるコラムや詳細な註、図表などは、ばななの作品世界をさらに広げ、鑑賞を深める役割を果たしている。この書の刊行を機にばなな文学と対峙することをお薦めしたい。

（荒地出版社 一九九九年七月 二〇七頁）

本体価格一、六〇〇円）

（たきもと・かずなり 本学助教授）